

日本の美 飛騨デザイン「ミュージアム飛騨」



ミュージアム飛騨は、飛騨・世界生活文化センターの中にある見学施設として、“日本の美 飛騨デザイン”をコンセプトに、2011年に前身の「岐阜県ミュージアムひだ」から展示内容を全面的にリニューアルする形でオープンしました。飛騨の匠の活躍の歴史と、その技を受け継いで発展してきた家具をはじめとする飛騨のデザイン性豊かな品々を紹介しています。



1、飛騨の匠の歴史

遠く飛鳥の時代から千数百年にわたり、都へ出役し宮殿や仏閣の造営に腕を揮った“飛騨の匠”。真摯で卓越した技と心は綿々と受け継がれ、今に残る飛騨の建造物や、高山祭の屋台にもその伝統を見ることができます。この「飛騨の匠の歴史」コーナーでは、古代から現代まで続く飛騨の匠の活躍の歴史を古代の奈良や飛騨での発掘資料、パネル、道具などの展示とともに紹介しています。



先ず「飛騨の匠の歴史」コーナーの前には、平城宮朱雀門の1/10スケールの模型がそびえ立っています。現在、奈良の平城宮跡には復元された朱雀門が建っていますが、朱雀門の構造を具体

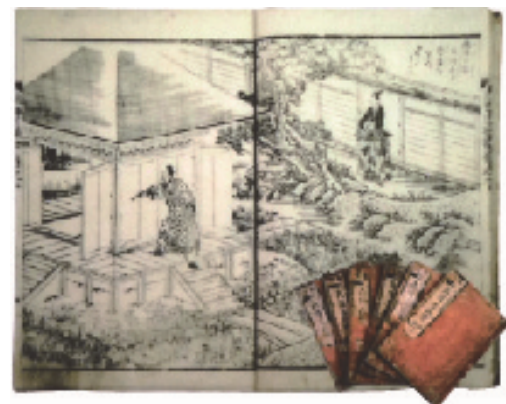
的に記す資料は残っていないため、復元は発掘調査をはじめ、現存する古代建築、文献資料など、様々な研究成果をもとに進められました。昭和39年から始まった朱雀門の復元プロジェクトでは、この模型を制作するところからスタートしました。

朱雀は四方の方角を司る四神の1つで、東の青龍・西の白虎・北の玄武と同様に、南を司る神獣とされています。そのため朱雀門は平城宮の南に位置し、外国からの使節を迎え入れ、朱雀門の前では歌垣などが行なわれていました。平城宮の朱雀門造営に飛驒の匠関わったという直接的な史料は確認されておりませんが、飛驒の地からはるばる来た匠たちは、平城宮の正門として威厳を放つ朱雀門を見ながら汗を流したことでしょう。ちなみに同じく“南”の門としてよく知られている羅城門は、平城京の京域の南端に位置する門です。

律令により徴発された飛驒の匠は、造宮省（のちに造宮職）、木工寮、修理職などに配属されました。これらの機関では、建造物のみならず宮廷や官庁で使われる家具・調度品などの製作にも携わっていたと考えられています。このコーナーでは、天皇位を象徴する高御座（玉座）をはじめ、古代の飛驒の匠が作ったと考えられる家具の数々が現在の匠である家具職人によって復元され展示されています。

また、「飛驒の匠の歴史」コーナーには、不思議なお堂が展示してあります。これは飛驒の匠の伝説として有名な『今昔物語集』に収録されたある話の中に登場するお堂を再現したものです。－平安遷都の時に飛驒工（ひだのたくみ）という工匠がいた。ある時、飛驒工は自分が建てたお堂に、同じく当時名を馳せていた絵師を招待した。絵師がお堂に訪ねると、扉は全て開いており、中に入ろうとすると扉が自然と閉じてしまう。それを繰り返し結局絵師はお堂の中に入ることが叶わず、その様子を見ていた飛驒工に笑われる。後日、今度は絵師川成が自邸に飛驒工を招き、描いた死体の絵で飛驒工を驚かせて仕返しをした。－この話をもとに、現代の匠である飛驒の大工がからくり技術を考案して再現したお堂です。

この『今昔物語集』以外にも、飛驒の匠は『新猿楽記』『栄花物語』『飛驒匠物語』など、古代より様々な文学作品に登場してきました。また飛驒の匠が建てたとされる建造物や、飛驒の匠が関わる伝承は飛驒のみならず日本各地に伝わっています。



2、飛騨の家具の歴史

森によって生かされ、木とともに歩んできた飛騨の文化は、飛騨の匠がそうであったように常に木材と深い関係にありました。例えば、高山祭の屋台彫刻や古い町並みなどには匠の技が随所に感じられます。このように受け継がれてきた木づくり文化は、大正時代を迎えると飛騨の家具として花開き、それ以降、飛騨の家具は今日まで続く飛騨の一大産業となっています。



飛騨の家具の始まりは、今から約100年前の大正9年（1920）に遡ります。ある出会いがきっかけで飛騨に曲木技術が伝わりました。この年は高山線の岐阜～各務ヶ原間がようやく開通したばかりで、高山駅の開業及び高山線全線の開通は、それから14年後の昭和9年（1934）のことです。そんな時代に飛騨の職人たちは見たこともないであろう椅子づくりに挑戦しました。当初から曲木を使った製品を作り得たのには、長い間に培ってきた木に対する知識と経験、そして木づくりに対する飛騨の心意気があったからのことでしょう。

「飛騨の家具の歴史」コーナーには、大正時代から現代に至るまで、時代時代の特徴を反映した製品が並んでいます。飛騨の家具の歴史の中には、戦前・戦中・戦後という激動の日本の100年史の時代背景も窺えます。

3、現代の飛騨の家具

現在、飛騨は日本を代表する家具産地の一つとして成長し、海外にもその販路を拡げています。飛騨地域には実に多くの家具メーカーがあります。各メーカーにそれぞれ特徴的な製品があり、一口に飛騨の家具と言っても、様々な家具が見られます。各メーカーは競争相手である一方、協同して製品開発、家具振興に取り組むなかで、匠の地としての誇りと伝統のもとに飛騨の匠ブランド構築を目指すその姿勢は、集団としてその力をいかに発揮した古代の匠たちの姿を彷彿とさせます。

飛騨地域にある木工関連企業で組織される協同組合 飛騨木工連合会では、平成10年（1998）に「自然との共生」「人がつくる」「心の豊かさ」「伝統を生かす」「永続性」の5カ条からなる“飛騨デザイン憲章”を制定し、その理念に基づくモノづくりに励んでいます。また、平成20年（2008）には「飛騨の家具」「飛騨・高山の家具」の二つを地域団体商標として登録し、「飛騨の家具」ブランド化を進めています。

この「現代の飛騨の家具」コーナーでは、飛騨にある家具メーカーが作った様々な椅子が展示されています。ベストセラーの椅子や、ロングセラーの椅子、身体にやさしい椅子、デザイン性に優れた椅子など、約100脚の椅子が並んでいます。座ってこそその椅子です。このコーナーにある椅子は全て座ることができます。

いろんな椅子に座って座り心地を確かめて、自分好みの椅子を見つけてください。飛騨の家具の歴史は、まもなく100年を迎えます。しかし、その前史として千数百年にも亘る飛騨の匠の活躍の歴史がありました。じっくりと椅子に腰掛けて、長い飛騨の匠の歴史を感じてみてください。



ミュージアム飛騨では、家具の他にも飛騨の木づくり文化が生んだ様々な木工製品を展示しています。国の伝統的工芸品にも指定されている飛騨春慶塗は、木目の美しさを生かした塗りが特長でここでは伝統的な春慶塗の製品だけではなく、近年欧米市場に向けて開発された製品なども展示されており、春慶塗の新たな可能性を発信しています。

同じく伝統的工芸品に指定されている一位一刀彫についても、ここでは他分野とのコラボレーション、従来には使われなかった材の使用など、既存の概念にとらわれない新たな挑戦としての木彫作品が展示され来館者の注目を浴びています。伝統技術を継承するとともに、その技を後世に繋げていこうとする職人の心意気が伝わってきます。

ミュージアム飛騨は、飛騨の匠の活躍の歴史と、その匠の技と心を受け継ぐ木づくり文化を紹介することで、自然を活かし、自然に生かされてきた日本のモノづくり文化を世界に発信しています。

